

## 幼小接続と特別の教科 道徳

——小学校入学期における道徳科への視座——

松 永 康 史

On the Connection to Elementary School Curriculum  
and Moral Education as a Special Subject

—The Viewpoint to the Moral Education as a Special Subject  
in the Elementary School Entrance Period—

Yasushi MATSUNAGA

### はじめに

現代的な教育課題の一つとして幼稚園や小学校の連携・接続のよりよい在り方が模索されている。幼稚園、保育所、認定こども園を卒園した幼児が、小学校に入学した時に小学校での生活や学習に適応できるように、幼児教育、小学校教育の両側から連携に関する取り組みや接続に関するカリキュラム作りが行われている。小学校では、国立教育研究所が出している『スタートカリキュラムスタートブック』、『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム——スタートカリキュラム導入・実践の手引き』や各県、市町村教育委員会が作成したカリキュラム作成の手引きやガイドブック等をもとに、スタートカリキュラムを作成することが求められている。

スタートカリキュラムについて検討する際、道徳教育という限定した立場から考察したものは少ない。それは、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが重要視されているからであろう。また、学校教育における道徳教育が、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校教育全体を通じて行われるものであるため、取り出して語られることは少ないこともその理由の一つであろう。一方で、道徳は教科化され、道徳の授業として適切に計画実施されることは当然の事であり、スタートカリキュラム上でもどのように設定するかは検討される必要がある。その際、幼児教育では生活の中で、体験し遊び学び育んできたであろう道徳性の芽生えを、小学校教育が引き継ぐ際、2重の難しさがあると考えられる。一つは、育んできたであろう道徳性について子どもが無自覚である点である。友達にやさしくすること、遊びのルールを守ることの大切さなど、生活体験を通して培われてきたであろうことを、小学校の道徳科では、意図的に言語化し、「道徳的諸価値についての理

解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習<sup>(1)</sup>にしなければならないからである。もう一つは、「考え、議論する道徳」授業が期待されている中で、子どもに社会規範を受容させ、行動を慣習化させることを重視し、社会が持つ伝統的な価値や規範をきちんと教えていくような授業だけではなく、自分なりの正しきの枠組みを、「考え、議論する」中で、主体的に構成していくことに寄与するような授業の在り方が求められるからである。

例えば、入学当初の1年生に学校生活の約束やきまりを教え、覚えさせ、行動を慣習化させることが現場の教員は重要と考えている。これは、1年生が学校生活に慣れ、気持ちよく生活してほしいという教員の健全な願いであろう。しかし、そのことがかえって、一定の教え込みを招くとすれば、そこに、「特定の価値観を児童に押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育の目指す方向の対極にある」<sup>(2)</sup>道徳科の授業をどのように設定するのかは、一筋縄にはいかない。学校生活の約束やきまりの遵守等と道徳科の授業を同時に語ることに慎重でなければならないことは承知したうえで述べるならば、道徳性の発達段階や学校生活の在り方などを踏まえたときに、入学当初における道徳教育は、決められた学校の約束やきまりを受容させ、行動を慣習化しながら、道徳科では身近な約束やきまりを取り上げ、「考え、議論し」、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養わなければならないのである。貝塚茂樹の言葉を借りれば、「道徳教育においては、『他律から自律』へという観点だけでなく、『自律から他律へ』という観点との往還を視野に入れ」<sup>(3)</sup>ることが必要となるのである。

そこで本稿では、まず、幼児教育における道徳教育はどのように行われているのかを確認するため、幼稚園教育要領等をもとに今日の教育政策としての道徳教育とそこに至るまでの経過を概観する。その後、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」としての「道徳性・規範意識の芽生え」を小学校においてどのように接続していくのかに注目し、考察する。特に、スタートカリキュラムの重要性が謳われるなかで、道徳科をどのようにスタートさせるのかについて、考察を試み、課題を明らかにすることが本稿の目的である。

## 1 幼児期の道徳教育

### (1) 現行幼稚園教育要領にみる道徳教育

道徳の教科化は、賛否両論あり、大きな注目を集めながら、2018年度から小学校において全面実施された。その注目度からすれば、幼児教育における道徳教育への注目は少ないように思われるが、幼児期における道徳教育はどのようになっているのであろうか。

幼稚園教育要領（平成29年告示）を見てみると、【表1】のように示されている（下線は筆者による）。

現行幼稚園教育要領において、ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育ま

【表1】

<p><b>第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」</b></p> <p>(4) <u>道徳性・規範意識の芽生え</u></p> <p>友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性がわかり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いをつけながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。<sup>(4)</sup></p>
<p><b>第2章 ねらい及び内容</b></p> <p><b>人間関係</b></p> <p>[他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。]</p> <p><b>3 内容の取扱い</b></p> <p>(4) <u>道徳性の芽生え</u>を培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまづきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。</p> <p>(5) 集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、<u>規範意識の芽生え</u>が培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いをつける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。<sup>(5)</sup></p>

れている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示している。その中の一つに、「道徳性・規範意識の芽生え」が記されている。ここでは、道徳性の芽生えと規範意識の芽生えの2つの側面が一つの形で記されている。一方、「第2章ねらい及び内容3内容の取扱い」には、道徳性の芽生えと規範意識の芽生えが別々に記されており、「道徳性の芽生えを培うに当たっては、～できるようにし、～育つようにすること、～芽生えてくることに配慮すること」、「規範意識の芽生えが培われることを考慮し、～育つようにすること」という表現で保育者の視点から述べられている。

## (2) 現行幼稚園教育要領に至る道徳教育の経緯

現行幼稚園教育要領には、道徳性の芽生えと規範意識の芽生えの2つの側面が記されていることを確認したが、2つの視点が記されたのは平成20年版からである。先行研究として、近年の幼児教育における道徳教育政策を概観したものとして宮本浩紀「幼小の連携・接続を踏まえた今後の道徳教育政策の方向性」<sup>(6)</sup>がある。それによれば、平成17年に打ち出された中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」の中の、「近年の幼児の育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている。また、小学校1年生などの教室において、学習に集中できない、教員の話が聞けずに授業が成立しないなど学級がうまく機能しない状況が見られる」<sup>(7)</sup>という記述を取り上げ、子どもの「規範意識」の重要性が示されていることを指摘している。また、幼稚園教育要領等における幼児期の道徳教育について、戸江茂博・隈本泰弘・

広岡義之「『特別の教科 道徳』の意義と役割—幼小連携強化における道徳授業への新提言—」<sup>(8)</sup>の中で、平成20年版から「規範意識」という要素が加えられたことが確認されている。これは、平成18年の学校教育法の改正において、幼稚園の教育目標（第23条）の中に、「2 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。」（下線は筆者による）として新しく示されたこともあってか、現行幼稚園要領でも、「規範意識」という要素が示されている。

一方、「道徳性」についてはどうであろうか。戸江らによれば、昭和31年の幼稚園教育要領が試案として作成され改訂される際、道徳教育を領域の中にも含みいれるような様々な考え方が提案され（採用はされなかった）、昭和38年の教育課程審議会答申（「幼稚園教育課程の改善について」）において、「人間尊重の精神に基づく道徳性の芽生えを正しく伸ばすこと」が強調され、道徳教育を幼稚園保育において展開すべきことが提案されたという。翌年改訂の幼稚園教育要領には、「道徳性の芽生え」という言葉が登場する。その後の昭和39年、平成元年、平成10年、平成20年と幼稚園教育要領の中の「道徳性」という言葉に着目し、【表2】のように整理した（下線は筆者による）。

昭和39年版では、「基本方針」の中に登場し、「指導上の一般的留意事項」として、幼稚園生活全体において道徳教育が行われることが求められるようになった。平成元年版では、「幼稚園教育の目標」として登場し、「特に留意する事項」として記された。「幼稚園教育の目標」の一つに「道徳性の芽生えを培う」ことを位置づけたのは、「道徳的心情や道徳的実践力の芽生えを培う幼児教育の視点を明確にするため」<sup>(9)</sup>と戸江らは述べている。また、「幼稚園教育の目標に関する法規定を子どもの育ちを軸に書き改めると同時に、新たに設定される予定の5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）への対応を想定して作成された」<sup>(10)</sup>としている。さらに「特に留意する事項」の内容を見てみると、人、自然、動植物との関りを通して豊かな心情（道徳的心情という言葉は使用されていない）を育むことが求められた。平成10年版では、平成元年版同様、「幼稚園教育の目標」として示されている。しかし、「道徳性の芽生え」に関して「指導計画作成上の留意事項」ではなく、「内容の取扱い」において取り上げられている。戸江らによれば、「道徳性の育ちが格上げされたものと考えられることができる」<sup>(11)</sup>と述べている。また、平成元年版に「特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること」が付け加えられている。これは、「幼児期なりの道徳的実践力を意識したものとなっている」<sup>(12)</sup>と戸江らは指摘している。平成20年版では、「幼稚園教育の目標」は先に述べた通り学校教育法に示され、「道徳性の芽生え」もそこに記されている。幼稚園教育要領では、平成元年版同様「内容の取扱い」において明記されている。また、平成20年版では、先に述べたとおり「規範意識の芽生え」が登場したことを確認しておく。

その後、平成21年に「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」の中で、道徳教育（徳育）に関して分析がなされ、「子どもの徳育の充実に向けた10の提言」<sup>(13)</sup>がなされている。宮本が「10の提言」の内容をまとめ、「4点の特徴（①家庭教育の充実・支援、②道徳

【表2】

昭和39年幼稚園教育要領	平成元年幼稚園教育要領	平成10年幼稚園教育要領	平成20年幼稚園教育要領
<p><b>第1章 総則</b>  <b>1 基本方針</b>                      (2) 基本的な生活習慣と正しい社会的態度を育成し、豊かな情操を養い、<u>道徳性の芽ばえ</u>をつちかうようにすること。</p>	<p><b>第1章 総則</b>  <b>2 幼稚園教育の目標</b>                      (2) 人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び<u>道徳性の芽生え</u>を培うようにすること。</p>	<p><b>第1章 総則</b>  <b>2 幼稚園教育の目標</b>                      (2) 人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び<u>道徳性の芽生え</u>を培うようにすること。</p>	
<p><b>第3章 指導および指導計画作成上の留意事項</b>  <b>1 指導上の一般的留意事項</b>                      (7) <u>道徳性の芽ばえ</u>をつちかうにあたっては、日常生活における基本的な生活習慣や、望ましい対人的態度や、幼児の自主性を尊重しつつ身につけさせるとともに、教師の是認や否認などを通して、よい行動、悪い行動を区別できるようにし、さらに道徳的心情が内面的に深まるように配慮して、積極的にかつ根気強く指導するようにすること。この際、幼稚園のよいふんい気をつくとともに、教師の人格や言動、友だちや家庭、あるいは地域社会の環境が特に強い影響を及ぼすことに留意すること。</p>	<p><b>第3章 指導計画作成上の留意事項</b>  <b>2 特に留意する事項</b>                      (2) <u>道徳性の芽生え</u>を培うにあたっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児とのかかわりの中で他人の存在に気づき相手を尊重する気持ちで行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。</p>	<p><b>第2章 ねらい及び内容</b>  <b>人間関係</b>  <b>3 内容の取扱い</b>                      (3) <u>道徳性の芽生え</u>を培うにあたっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児とのかかわりの中で他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきをも体験し、それら乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。</p>	<p><b>第2章 ねらい及び内容</b>  <b>人間関係</b>  <b>3 内容の取扱い</b>                      (4) <u>道徳性の芽生え</u>を培うにあたっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児とのかかわりの中で他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきをも体験し、それら乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。                      (5) 集団の生活を通して、幼児が人とかかわりを深め、<u>規範意識の芽生え</u>が培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。</p>

教育の指導体制の確立、③子どもの現状及び発達段階を踏まえた指導、④情報モラル教育の推進」が認められる<sup>(14)</sup>と述べている。

次に、平成26年「道徳教育に係る教育課程の改善等について（答申）」では、「今回の審議では、小・中学校の道徳教育の教育課程を中心に検討を行ったが、本来、道徳教育は、人の一生にわたる人格形成に関わる課題であって、就学前の幼児期、高等学校、特別支援学校などにおける道徳教育についても、一貫した理念に基づき、改善を図っていく必要がある」（下線は筆者による）<sup>(15)</sup>とし、「幼稚園教育要領においては、幼児の道徳性や規範意識の芽生えを培うことが示されている。今後、その充実を図るとともに、例えば、幼稚園における遊びを通じた課題解決型の指導を充実し、そのよさを小学校低学年においても取り入れるなど、幼小接続を円滑化していくことが有効と考えられる<sup>(16)</sup>と記されている。また、「今回の審議においては、幼稚園から高等学校段階までを通じて、現行の小・中学校の学習指導要領に示されている道徳の内容項目に相当するものを一覧にして作成することや、高等学校での道徳教育の要として、

例えば『人生科』のような名称で中核的な指導の場を設けることなどについての意見もあった<sup>(17)</sup>とあり、今後、「小・中学校段階で作成・使用されてきた道徳の内容項目を幼稚園段階における道徳教育にも適用可能なものにすることが目指されるという<sup>(18)</sup>」という見方もある。

## 2 小学校における道徳教育

### (1) 現行小学校学習指導要領にみる幼児期の道徳教育との関係

スタートカリキュラムに関し、「小学校学習指導要領第2章第5節生活」（平成29年告示）「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の1(4)において以下のように示されている。

他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。<sup>(19)</sup>

また、国語、算数、音楽、図画工作、体育、特別活動においても、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」について以下のように示されている。

低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導（特別活動においては、「関連的な指導」）や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。<sup>(20)</sup>

「特別の教科 道徳」についてはどうであろうか。「特別の教科 道徳」では、他教科のように、「指導計画の作成と内容の取扱い」での幼児教育との接続についての記述は見られない。だからといって、道徳科が、スタートカリキュラム作成時に配慮を怠ってよいということにはならないだろう。そのことを幼稚園教育要領と小学校教育要領の記述から、確認することにする。

前節で見たように、幼児教育において「道徳性の芽生え」は戦後の道徳教育が推進される中で、取り上げられ、現在、「道徳性・規範意識の芽生え」は、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして記されていることを確認した。それでは、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿としての「道徳性の芽生え」は、小学校道徳

教育にどのように引き継がれるのであろうか。

領域「人間関係」について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち「道徳性・規範意識の芽生え」と特に関係が深いと考えられる項目について取り上げた。また、小学校における道徳教育、道徳科の幼小の接続に関係が深いと考えられる項目を取り上げ、つながりを表にした。【表3】である。

領域「人間関係」ねらいの(3)は、社会生活における望ましい習慣や態度を身に付けることであり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の(4)「道徳性・規範意識の芽生え」と深く関連している。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を、小学校の教師と共有するなどの連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めることは、幼稚園教育要領の「第1章総則第3教育課程の役割と編成等5小学校教育との接続に当たっての留意事項」に記されている。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫することが、小学校学習指導要領の「第1章総則第2教育課程の編成4学校段階等の接続」に記されている。このことから分かるように、幼児の主体的な遊びを中心とした総合的な指導をする幼児教育から教科カリキュラムで行われる授業を中心とした小学校教育へとうまく引き継ぐために保育者と小学校教員の連携の大切さや教育課程を接続する重要性が指摘されている。それでは、小学校における道徳教育、道徳科は、幼児教育との引き継ぎを、どのように考えているのだろうか。「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳」では、「第2章道徳教育の目標第1節道徳教育と道徳科」において、「学校における道徳教育は、児童の発達の段階を踏まえて行われなければならない」<sup>(21)</sup>とし、「例えば、小学校の時期においては、6年間の発達の段階を考慮するとともに、幼児期の発達の段階を踏まえ、中学校の発達の段階への成長の見通しをもって、小学校の時期にふさわしい指導の目標を明確にし、指導内容や指導方法を生かして、計画的に進めることになる」(下線部は筆者による)<sup>(22)</sup>としている。

## (2) 発達の段階と道徳性

人間の道徳性がどのように発達するか<sup>(23)</sup>について、心理学の領域において子どもの道徳性発達研究は進められてきている。ピアジェやコールバーグの道徳性の認知発達理論が確認できる。一方で、これらの発達段階説に対して、イギリスの教育学者であるノーマン・ブルは、「ピアジェの発達段階説について他律の捉え方が不十分であると批判して、発達段階が段階であるわけではなくレベルでもあることを指摘し、他律は私たちにとって生涯にわたって道徳的判断の根拠の1つになっていることを明らか」<sup>(24)</sup>にし、ギリガンは「コールバーグの発達段階説が道徳的判断という一面的なものでしかなく、かつては女性と結びつけられてきた共感や感情が欠落している」<sup>(25)</sup>と批判している。また、進化心理学の立場からトマセロは、「私たち人間は生後9ヶ月頃から他者の行為の目的や意図などを理解できるようになり、それをもとに協力的な関係を構築しようとすることを明らかにしている」<sup>(26)</sup>のであるが、道徳性の発達について必ずしも全体的な見通しを提供するものとはなっていないとの指摘がある。それゆえ、「子ども

【表3】

領域「人間関係」	小学校道徳教育
<p>他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。 ねらい</p> <p>(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。</p> <p><b>内容</b></p> <p>(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。</p> <p>(2) 自分で考え、自分で行動する。</p> <p>(3) 自分でできることは自分でする。</p> <p>(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。</p> <p>(5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。</p> <p>(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。</p> <p>(7) 友達よさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。</p> <p>(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。</p> <p>(9) <u>よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。</u></p> <p>(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。</p> <p>(11) <u>友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。</u></p> <p>(12) 共同の遊具や用具を大切に、皆で使う。</p> <p>(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。</p> <p><b>3 内容の取扱い</b></p> <p>(4) <u>道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまづきをも体験し、それら乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。</u></p> <p>(5) <u>集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いをつける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。</u></p>	<p><b>小学校学習指導要領</b> <b>第1章総則</b> <b>第6 道徳教育に関する配慮事項</b></p> <p>2 各学校においては、児童の発達の段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図ること。その際、各学年を通じて、自立心や自律性、生命を尊重する心や他者を思いやる心を育てることに留意すること。また、各学年段階においては、次の事項に留意すること。</p> <p>(1) 第1学年及び第2学年においては、挨拶などの基本的な生活習慣を身に付けること、<u>善悪を判断し、してはならないことをしないこと、社会生活上のきまりを守ること。</u></p> <p><b>小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳</b> <b>第2章 道徳教育の目標</b> <b>第1節 道徳教育と道徳科</b></p> <p>発達の段階を踏まえると、幼児期の指導から小学校、中学校へと、各学校段階における幼児、児童、生徒が見せる成長発達の様子やそれぞれの段階の実態等を考慮して指導を進めることとなる。その際、例えば、小学校の時期においては、6年間の発達の段階を考慮するとともに、<u>幼児期の発達の段階を踏まえ</u>、中学校の発達の段階への成長の見通しをもって、小学校の時期にふさわしい指導の目標を明確にし、指導内容や指導方法を生かして、計画的に進めることになる。</p>

たちの現実に向き合い、寄り添いながら、道徳性を獲得するプロセスを柔軟に捉えつつ、道徳教育に取り組まなければならない<sup>(27)</sup>という走井洋一の指摘は、接続期の子どもに向き合い、



寄り添いながらしか道徳教育ができないことを示唆している。

また、『他律から自律へ』という認知発達段階の枠組みは、西洋近代の自律と自己決定を重視する倫理思想を基盤としているが、自律の段階に到達したからといって他律としての社会律（社会規範）から完全に開放されるわけではない<sup>(28)</sup>という貝塚の指摘も、道徳教育としての現場である学校において、子どもが直面している課題であろう。

### 3 接続期における道徳科の授業

#### (1) 教科書会社が示す入学期4月の授業内容

道徳が教科化され、「主たる教材として教科用図書を使用しなければならない<sup>(29)</sup>とされるように、検定教科書が使用されるようになった。その中で教科書会社は、年間指導計画作成の資料も提示している。そこで、その資料の1年生4月入学期において、どのような内容項目を考えているのかに注目する。道徳という言葉を聞くのも初めて、道徳という授業も初めてである子どもたちに、どのような内容項目を考えているのだろうか。

そこで、小学校の道徳教科書を作成している以下の教科書会社の年間指導計画作成資料<sup>(30)</sup>を見ていくことにする。【表4】は、4月の最初の授業の主題名や内容項目を表にまとめたものである。

東京書籍株式会社  
 学校図書株式会社  
 教育出版株式会社  
 光村図書出版株式会社  
 日本文教出版株式会社  
 株式会社 光文書院  
 株式会社 学研教育みらい  
 廣済堂あかつき株式会社

【表4】

出版社 (主題1前)	主題名1	内容項目	ねらい	主題名2	内容項目	ねらい
東京書籍	楽しい学校	C よりよい学校生活、集団生活の充実	学校の人々に親しみを持ち、学校生活を楽しくもうとする心情を育てる。	時間のきまり	A 節度、節制	時間を守ることのよさに気づき、きちんとした生活をしようとする意欲を育てる。
学校図書	たのしいがっこう	C よりよい学校生活、集団生活の充実	学校での1日の生活や、1年間の生活の様子を知ることから、毎日を楽しく過ごそうとする心情を育てる。	あかるいあいさつ	B 礼儀	1日の生活のさまざまな場面での挨拶の様子を表した絵を見て、気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心がけて、皆に明るく接しようとする態度を養う。

<p><b>教育出版</b>                  どうとくでは こんながくしゅうをするよ 教材に示された絵や文章をもとに、友達と考えを交流することをおして、道徳科の学習における学び方を理解するとともに、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めようとする意欲をもつ。</p>	<p>がっこうだいすき</p>	<p>C よりよい学校生活、集団生活の充実</p>	<p>学校生活について考えることをとおして、学校や学級・友達に関するさまざまなことに気づき、よりよい学校生活や集団生活を送ろうとする心情を育てる。</p>	<p>たのしいことがいっぱい</p>	<p>C よりよい学校生活、集団生活の充実</p>	<p>教師や友達などの多くの人の関わりについて考えることをとおして、学校や学級・友達に対する理解を深め、よりよい学校生活や集団生活を送ろうとする心情を育てる。</p>
<p><b>光村図書</b>                  扉の詩や目次を基に、道徳が何をどのように学ぶ時間であるかの見通しをもたせ、道徳の授業への期待感を高める。</p>	<p>がっこうだいすき</p>	<p>C よりよい学校生活、集団生活の充実</p>	<p>授業や休み時間、清掃の時間などの様子を描いた絵を通して、学校生活の楽しさについて考えさせ、先生や上級生、友達に親しみ、学校生活を楽しもうとする心情を育てる。</p>	<p>きもちのよい せいかつ</p>	<p>A 節度、節制</p>	<p>食事や歯磨き、就寝など、児童の日常生活を描いた絵を通して、気持ちのよい毎日過ごすために大切なことについて考えさせ、健康や安全に気をつけ、物や金銭を大切に、身の回りを整え、規則正しい生活をしようとする実践意欲と態度を育てる。</p>
<p><b>日本文教出版</b></p>	<p>がっこうがたのしみだ</p>	<p>C よりよい学校生活、集団生活の充実</p>	<p>学校の生活で楽しみにしていることについて考えるなかで、これからの学校生活への期待を膨らませ、学校の生活を楽しもうとする態度を養う。</p>	<p>かがやけいのち</p>	<p>D 生命の尊さ</p>	<p>動物や植物、そして赤ちゃんのいきいきとした命を感じ取るとともに、自分自身が元気でいられることを喜び、すべての生命あるものを大切にしようとする心情を育てる。</p>
<p><b>光文書院</b></p>	<p>みんなでなかよく</p>	<p>B 友情、信頼【関連】 C よりよい学校生活、集団生活の充実</p>	<p>友達と仲よくし、助け合おうとする。</p>	<p>あいさつパワー</p>	<p>B 礼儀【関連】 A 正直、誠実</p>	<p>時と場に応じたあいさつが分かり、相手に合わせて明るく心を込めたあいさつをしようとする。</p>
<p><b>学研教育みらい</b></p>	<p>あいさつのきもちよさ</p>	<p>B 礼儀</p>	<p>日々の生活場面における挨拶に目を向け、気持ちのよい言葉遣いや所作が明るく気持ちにつながることに気づき、身近な人々に明るく接しようとする心情を育てる。</p>			
<p><b>廣済堂あかつき</b></p>	<p>学校生活への期待</p>	<p>C よりよい学校生活、集団生活の充実</p>	<p>場面絵に描かれた様々な学校生活の様子を通して、友達とともに楽しく学校生活を送ることのよさについて考え、学校の人々に親しみ、学級や学校の生活を楽しくしようとする道徳的実践意欲を培う。</p>	<p>規則正しい生活</p>	<p>A 節度、節制</p>	<p>場面絵に描かれた一日の生活の様子を通して、毎日を元気に過ごすにはどうしたらよいかについて考え、健康や安全に気をつけ、身の回りを整え、規則正しくきまりよい生活を送ろうとする道徳的実践意欲を培う。</p>

上記の表からも分かるように、最初の道徳科の授業として、8社中6社が内容項目「Cよりよい学校生活、集団生活の充実」を取り上げている。残りの2社中1社も関連の内容項目とし

て「Cよりよい学校生活、集団生活の充実」<sup>(31)</sup>を取り上げている。ねらいをみても、「学校生活を楽しもうとする心情を育てる」「よりよい学校生活や集団生活を送ろうとする心情を育てる」「学級や学校の生活を楽しくしようとする道徳的実践意欲を培う」からも分かるように、学校生活への適応を狙ったものが多く確認できる。8社中1社は、内容項目「B礼儀」を取りあげ、あいさつに目を向け、「身近な人々に明るく接しようとする心情を育てる」ことになっているが、これも小学校での集団生活によりよく適応させるための手段についてであると考えられなくもない。

## (2) スタートカリキュラムと道徳教育

次に、平成26年3月に愛知県幼児教育研究協議会の報告『小学校教育を見通した幼児期の教育を考える―接続期における教育課程・保育課程の編成に向けて―』を参考に幼小接続と道徳の関係を考察する。上記報告には、「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の3つの力を設定し<sup>(32)</sup>、アプローチ期からスタート期へのつながりを示している。「生活する力」を見てみると、小学校スタート期（4月～5月）に道徳との関連として、目指す子ども像<sup>(33)</sup>を以下の7つ示している。

- ・使う物や使う場所を大切に使う
- ・使ったものを元の場所に片づける
- ・掃除の方法が分かり、友達と助け合って使った場所をきれいにする
- ・登校や始業の時刻を守る
- ・時間割表を見て、1日の生活の見通しを立てる
- ・チャイムや放送を聞き、自分で判断して行動する
- ・宿題や当番活動など自分がやるべきことを最後まで行う

また、「かかわる力」を見てみると、道徳との関連として、目指す子ども像<sup>(34)</sup>を以下の5つ示している。

- ・先生や友達に気持ちのよい返事やあいさつをする
- ・上級生に親しみやあこがれの気持ちをもって接する
- ・きまりや約束を守る
- ・よいことと悪いことを区別し、よいと思うことを行う
- ・友達や思いやりをもって接し、仲良くする

「学ぶ力」については、道徳との関連は示されていない。以上の目指す子どもの姿を考慮し、スタートカリキュラムを作成することが望まれるだろう。その際、道徳科として取り扱う際には、内容項目との関連は避けて通れない。その際、多くの教科書会社が最初に取り上げた内容項目「Cよりよい学校生活、集団生活の充実」からスタートするのであれば、目指す子ども像とどうつながりをもたせられるだろうか。

一案として、関連付けを検討してみたものが次の【表5】である。

【表5】

	小学校スタート期に目指す子ども像	道徳の内容項目
生活する力	使う物や使う場所を大切に使う	A 節度・節制 C 規則の尊重
	使ったものを元の場所に片づける	A 節度・節制 C 規則の尊重
	掃除の方法が分かり、友達と助け合って使った場所をきれいにする	C 勤労、公共の精神
	登校や始業の時刻を守る	C 規則の尊重
	時間割表を見て、1日の生活の見通しを立てる	A 希望と勇気、努力と強い意志
	チャイムや放送を聞き、自分で判断して行動する	C 規則の尊重
	宿題や当番活動など自分がやるべきことを最後まで行う	A 希望と勇気、努力と強い意志
かかわる力	先生や友達に気持ちのよい返事やあいさつをする	B 礼儀
	上級生に親しみやあこがれの気持ちをもって接する	B 礼儀
	きまりや約束を守る	C 規則の尊重
	よいことと悪いことを区別し、よいと思うことを行う	C 公正、公平、社会正義
	友達や思いやりをもって接し、仲良くする	B 親切・思いやり

筆者が目指す子ども像と内容項目の関連付けを検討してみると（表に示した内容項目以外の内容項目も考えられるだろうが）、教科書会社が真っ先に取り上げた内容項目「Cよりよい学校生活、集団生活の充実」を位置づけることが困難であった。上記の目指す子ども像から、内容項目を考えるならば、スタートカリキュラム作成時の弾力的な時間割を考え、教科書の順序で示す内容項目以外からのスタートも検討していく必要があるだろう。

もう一つ、例を挙げ、考察する。国立教育研究所が発行している『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム——スタートカリキュラム導入・実践の手引き』の「第2章スタートカリキュラムをデザインしよう」「2 各学校で行うスタートカリキュラムのデザイン」の中に、「第1学年 単元配列表（例）」が示されている。そこでは、生活科の「がっこうだいすき みんななかよし」の関連的な指導<sup>(35)</sup>として道徳科「げんきにあいさつ」が紐づけられている。しかし、合科的な指導として紐づけていないため、「第3章スタートカリキュラムを実践しよう」で示されている実践事例1「がっこうだいすき みんななかよし」単元の展開（全20時間：生活科12＋国語科5＋音楽科1＋図画工作科2）には、道徳の授業は組み込まれていない。よって、関連的な指導がどういったものか具体的なイメージを描けない。

しかし関連的な指導を考えると、およそ次のような指導が想像できる。実践事例1を見てみると、子どもたちは、学校探検をする中で、教職員に質問したり教えてもらったりする時にあいさつすることや保護者に学校を案内・紹介するさいにもあいさつすることになる。そのことから、道徳科「げんきにあいさつ」で、教科書会社が示す年間指導計画資料では1社（2つ目の授業で取り上げたのは、2社）しか取り上げていなかった内容項目「B礼儀」を取り上げ、「気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接すること」<sup>(36)</sup>と紐づけて学習し、学校探検や探検後の案内・紹介時に役立てたいということになる。

ここで、内容項目「B礼儀」について、小学校学習指導要領解説に立ち返る。指導の要点として、第1学年及び第2学年では、「指導に当たっては、日常生活を送るために欠かせない基本

的な挨拶などについて、具体的な状況の下での体験を通して実感的に理解を深めさせることが重要である」とのことから、生活科の学校探検をする中で、教職員に質問したり教えてもらったりする時のあいさつや保護者に学校を案内・紹介するさいのあいさつという体験を通すことが重要になる。その意味において、関連的な指導の有効性が見えてくる。しかし、小学校学習指導要領解説では、2学年をまとめた児童の発達段階に関する記述しかないのである。学校における道徳教育は、児童の発達段階を踏まえて行わなければならないといいつつながら、入学期における児童の発達段階については詳細に述べてはいないのである。そのことは、小学校入学期においては、やはり幼児教育からの連携・引継ぎが欠かせないことを再確認させる。

先述した平成26年3月に愛知県幼児教育研究協議会の報告『小学校教育を見通した幼児期の教育を考える―統期における教育課程・保育課程の編成に向けて―』の「かかわる力」に關し、アプローチ期（10月～3月）における目指す子ども像の1つを「親しみをもって日常のあいさつをする」としている。小学校スタート期においては「先生や友達に気持ちのよい返事やあいさつをする」であった。アプローチ期の姿からスタート期の姿を比較して、道徳科は何に配慮すればよいのであろうか。「親しみをもって日常のあいさつをする」子どもたちは、既に、体験を通してきている。そうであるならば、そのあいさつにはどんな意味があるのかを言語化し、その意味を「考え、議論する」授業にしなければならないだろう。また、「先生、おはよう」と親しみをもってしてきたあいさつが、小学校でもよしとされるのか、「先生、おはようございます」といった丁寧な言い方でなければ気持ちのよいあいさつではないのか、礼儀として失礼なのか（道徳的ではないのか）、日常のあいさつについても「考え、議論する」きっかけになるだろう。これは、先生には、「おはようございます」という丁寧な言い方をするのですよという指導（他律）と先生に親しみをこめて「おはよう」と言ってきた、私のあいさつの仕方（自律）を再度、考え直すような観点が重要ではないだろうか。

こういった「考え、議論する」道徳授業が、貝塚が述べる「他律から自律」へという観点だけでなく、「自律から他律へ」という観点との往還に寄与するのではないだろうか。

## おわりに

小学校入学期における道徳科の授業をいかにつくるかに焦点をあて、課題を明らかにするため考察してきた。最後に見えてきた課題を整理しておく。一つ目は、小学校入学期において道徳科の教科書では、内容項目C「よりよい学校生活、集団生活の充実」が入口となっていたが、その内容項目が、子どもたちの今の姿、目指す姿とどう関連付けられるのかが明確ではないことである。今後、子どもの姿によっては、別の内容項目を設定した方がよい場合もあるだろう。そのための年間指導計画資料であろう。「幼児の発達段階を踏まえ」たとき、どの内容項目からスタートするのか、スタートカリキュラム作成の重要なポイントであろう。また他教科との合科的・関連的な指導をどのように設定するのが問われるだろう。

二つ目は、あいさつの例で述べたように、子どもたちの発達段階、今の姿や目指す姿と内容

項目の中で生じるであろう疑問や葛藤を「考え、議論」できるかどうかであろう。そのような「考え、議論する」道徳が可能であれば、「他律から自律へ」という一方向的なものとして捉えたり、「他律か自律か」といった二者択一のものとして捉えたりすることを乗り越え、「他律」と「自律」の観点を往還しながら、調和させていくことで、自己の生き方についての考えを深める学習につながるのではないだろうか。

## 註

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社、2018年、165頁
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき、2018年、16頁
- (3) 貝塚茂樹『新時代の道徳教育』ミネルヴァ書房、2020年、29頁。貝塚は、「他者とのつながりを基盤とする道徳教育においては、他律としての社会律（社会規範）との関係を無視することはできない」（29頁）と述べている。
- (4) 文部科学省『幼稚園教育要領（平成29年告示）』フレーベル館、2017年、6頁
- (5) 同書、17頁
- (6) 宮本浩紀「幼小の連携・接続を踏まえた今後の道徳教育政策の方向性」『信州豊南短期大学紀要（33）』2016年、39-50頁
- (7) 中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」2005年、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1420140.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1420140.htm)
- (8) 戸江茂博・隈本泰弘・広岡義之が「『特別の教科 道徳』の意義と役割—小連携強化における道徳授業への新提言—」『神戸親和女子大学国際研究センター紀要』第2号、2016年、53-67頁
- (9) 同書、59頁
- (10) 同書、59頁
- (11) 同書、59頁
- (12) 同書、60頁
- (13) 「10の提言」は以下の通りである。「日的な課題や発達段階ごとの特徴を踏まえ、社会総がかりでの徳育の充実に向けて、発達段階に応じた徳育の充実への理解と実践が必要であり、10の方策を以下のとおり提言する。  
提言1 家庭で子どもに愛情を持って接し、生活上の基本的なしつけを行うこと  
提言2 家庭教育の支援とワーク・ライフ・バランスの推進を図ること  
提言3 子育て関係団体と連携協力し、地域の子育ての取組を充実すること  
提言4 全校的な体制づくりを通じ、各学校において道徳教育を充実すること  
提言5 道徳教育に関する教材の活用への支援と教師の資質向上を図ること  
提言6 発達段階に応じた子どもの体験活動の充実を図ること  
提言7 絵本の読み聞かせや古典に親しむ等の読書活動の充実を幼児期から図ること  
提言8 有害情報から子どもを守る取組や情報モラル教育を推進すること  
提言9 子ども向けの良質な番組提供や出版等への取組を充実すること  
提言10 子どもの徳育の充実に向けた啓発活動を推進すること  
子どもの徳育に関する懇談会「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」2009年、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286128.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286128.htm)
- (14) 宮本、前掲、43頁

- (15) 中央教育審議会「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」2014年、18頁（頁づけは、文部科学省 HP 上の PDF ファイルの頁づけによる）。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf)
- (16) 同書、19頁
- (17) 同書、20頁
- (18) 宮本、前掲、44頁
- (19) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社、2018年、114頁
- (20) 同書、38頁、92頁、125頁、134頁、154頁、188頁
- (21) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき、2018年、10頁
- (22) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき、2018年、11頁
- (23) 走井洋一「第4章 道徳性の発達理論」笹田博道・山口匠・相澤伸幸編著『考える道徳教育』福村出版、2018年を参照
- (24) 同書、46頁
- (25) 同書、47頁
- (26) 同書、49頁
- (27) 同書、49頁
- (28) 貝塚、前掲、29頁
- (29) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき、2018、103頁
- (30) 年間指導計画資料については、各教科書会社 HP 上からダウンロード可能な PDF、Excel ファイルを参照した。
- (31) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社、2018年、168頁では、「〔第1学年及び第2学年〕において、先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくすること」を取り扱う項目としている。
- (32) 3つの力の設定についての考察は、杉山美加・塚本慎一「各県教育委員会・協議会の保幼小接続に関する手引きの比較分析—海四県の実践状況に着目して—」『人間生活文化研究』No. 28、2018年、569-577頁参照。
- (33) 愛知県幼児教育研究協議会『小学校教育を見通した幼児期の教育を考える—統期における教育課程・保育課程の編成に向けて—』2014年、16頁、<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/209279.pdf>
- (34) 同書、18頁
- (35) 関連的な指導とは、「教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するもの」である。文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター編著『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き』2018年、15頁（頁づけは、国立教育政策研究所 HP 上の PDF ファイルの頁づけによる）。[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum\\_180322.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_180322.pdf)
- (36) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき、2018年、44頁

（受理日 2021年1月7日）